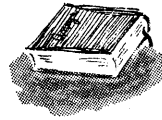


始まり



山本秀子

今の私は、「アーアー」と五回、カラスのような泣き声で生まれてきた四ヵ月になる子どもと、うんちをみつめつつの、書物からは縁遠い、バカになる一方の生活を送っている。それはまた、昨日と今日は決して同じであってはくれない、常に保守的であることを許してはくれない生活でもある。前の私ならとても耐えきれないだろう。でも今は楽しい。

何といっても天(神)が授けてくれたものの素晴らしさに驚き、感謝する毎日である。たとえば生後一ヵ月半ごろ、目がみえ、耳がきこえ始めると、それまでの、こちらの思うことを伝える手段が抱く以外になかったのが一変して、落着いた晴やかな生活になったことである。そして目下は、指手が動きはじめ、両手をからみあわせたり、親指だけが口にはいるようになりつつ

ある。私が自分の手を使い痛め、手を使うまいと思うが何をするにも手がいることを痛みとともに知ることあわせ考えると、「手が使える、手が手の役目をする」ことの素晴らしさに、ただただ驚き、そう生まれることのできたこの子は幸せ者と思うのである。

子どもの生活リズムが、まだまだ大人のとかけ離れていたころ、おむつ替え—お乳—あやす—おむつ替え—あやして寝かせる、の繰返しを何度しただろうか。真夜中でもおかまいなしの生活だし、どれ一つのバランスが崩れても寝てくれず、またはじめからやり直してあった。徹底して自分の要求を泣いて訴えるし、それを満たさねば泣きやんでくれない。途中で放ったりごまかしたりが許されない。どうしてよいかわからず、子どもと一緒に泣い

たこともある。そんな夜を何度も繰返すうちに、一つずつ積んできた積木をパッとこわされても、また一つからやり直す大らかな気持ちと、やり直す時に前とはどこか違った工夫がいることに気付いた。気を長く持ちつつも行動は子どもをよく見つ、手際よく、子どものリズムにのり遅れないことである。泣いていても大泣きに至る直前に抱き上げるとか、口の動き一つからも語る何かを見るのである。赤ちゃんは泣くも笑うも人の力を借りなくてはできない。(ふと考えると形こそちがえ、大人も人の中で泣いたり笑ったりしているのだが)それがとても負担に思え、イライラしたこともある。しかし月日が解決するというか、子ども自身、育つところがちゃんとあることに気付かされる。そんな時、育児書など

のわくにとらわれると、余計イラだちもするが、自然に流されて、それでも今はいいんだといってくれる人がいることと、春を信じて低空飛行していうという気持ちでのりこえていける。そして過ぎてみるとあるリズムをふんでいることに気付くことがしばしばである。一日中、そして一生のつきあいだから楽しくいきたい、そのことを一番に考えると、いろいろなわくがとれてくる。

そして生活全体も、ものごとの原点(はじまり)にたちもどって考えられるようになる。

「外」を意識した生活のペールをはぎとられることもしばしばである。大人の都合ばかりで先に突走ることを、泣いて呼び、許してくれぬ子ども。そんな時、改めて本先にすべきこと

なのかをふりかえらせ、あせつてしなくても反省させられる。本先に先すべきことをごまかしていたことを知らされる。

「子どもは一冊の本である」の詩を思いおこし、うんち(基本的なこと)をみつめる生活も、子どもの発達に目をみはる生活も、私にもものごとの原点(はじまり)を考え直させ、新しいフィールドでの私の保育の始まりである。

(元 お茶の水幼稚園)